


<p>第 264 回 都市懇サロン レポ ー ト</p>	<p>「現代アートとまちづくり」</p>		
<p>講 師</p>	<p>関口 正洋 氏 ((株)アートフロントギャラリー)</p>	<p>開催日</p>	<p>令和 4 年 10 月 11 日(火) 18:00~20:00</p>
<p>講 師 プロフィール</p>	<p>神奈川県生まれ。東京大学医学部健康科学科卒。アートフロントギャラリー所属。「大地の芸術祭」の事務局、NPO 越後妻有里山協働機構の運営などに関わったのち、「奥能登国際芸術祭」の立上げから企画コーディネートに従事。中小企業診断士</p>		
<p>お話 の 概 要</p>	<p>■現代アートで地域は起こせるか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大地の芸術祭の開催地となる十日町市、津南町は魅力があるものの、近年、人口、土地、コミュニティ、土地に対する誇りが空洞化している。</li> <li>・アートを介して、住民が地域の魅力を再発見することで、地域を起こそうとした。</li> <li>・そのため、自然や地域を感じるアート、立場や世代を超えた共同制作、地域資源の活用を図り、かつ作品を地域に点在させることで、地域に目を向け回遊できるようにしている。</li> <li>・公共事業として作品をつくり、海外とのつながりもつくり、誇りを回復させようとした。</li> </ul> <p>■大地の芸術祭の軌跡:これまでの歩みと課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市町村合併後、十日町市ではアートを軸として地域づくりを試みたが、地元は反対だった。</li> <li>・それに対してしてサポーター組織「こへび隊」を結成し、地域とのコミュニケーションを図るとともに地域課題にも取り組んだ。中越大地震の際には復興支援も行った。</li> <li>・徐々に理解いただけるようになり、空き家や廃坑の活用を相談するに至っている。</li> <li>・20 数年取り組んできた結果、「土地に対して誇りを取り戻す」「雇用の創出と移住者が増える」「美術を通して世界や都市と地域がつながる」という目的が達成されつつある。</li> </ul> <p>■地域づくりと現代アートを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ただアートを展示すればよいというのではなく、次の6点を重視している。 <ul style="list-style-type: none"> <li>住民の当事者意識の喚起</li> <li>住民が得意手を発揮</li> <li>地域に開口部をつくる</li> <li>地域に対する誇りの回復</li> <li>地縁・血縁を超えたネットワーク</li> <li>地域のものさしをつくる</li> </ul> </li> <li>・アートや芸術祭が地域に目を向ける機会となり、芸術祭に巻き込まれながら誇りを回復するきっかけになっている。</li> </ul>		
<p>意 見 交 換 の 概 要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市部において小さな単位で行っている事例はあるか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→横浜市のBankARTや芸術不動産はよい事例である。</li> <li>→大きな都市でも空き家・空き店舗は課題となってくるので参考にしたい。</li> </ul> </li> </ul>		
<p>記 録 者 の ひ と こ と</p>	<p>立ち上げ時の目標設定の的確さと、それに対して個々の事業がブレずに位置づけられ、息長く実践されていることで、地域を巻き込んでいる。そのことで、世界的に注目されるアートイベントであるとともに、よい意味で「地元のイベント」となっている。</p> <p style="text-align: right;">《都市懇サロン運営部会 委員 氏原茂将》</p>		